

活動報告書
2024

未来につながる「最後の社会貢献」

貴方の「思い」を
のこす遺贈へ

貴方の「思い」をのこす遺贈へ

遺贈寄付サポートセンターからのご挨拶

2024年1月の能登半島地震とそれに続く豪雨被害、海外に目を向ければウクライナの戦禍が続く中、将来のよりよい社会の実現と社会貢献のため、皆様に遺贈寄付をお伝えしようと全国を巡った2024年度でした。各地のセミナーで多くの方にご参加いただき、皆様の遺贈寄付に寄せるご相談をお受けしました。尊い思いをお話し下さった方々に感謝し、ここに、2024年度の活動報告をさせていただきます。

日本財団遺贈寄付サポートセンターの活動は、今年10年目を迎えました。それぞれの方々の大切な思いを未来につなぐために、その方の思いに寄り添いながらこれからも丁寧にご相談を伺って参りたいと思います。

日本財団遺贈寄付サポートセンター 木下園子

2024年度 寄付実績

遺贈寄付

434,499,009 円<9件>

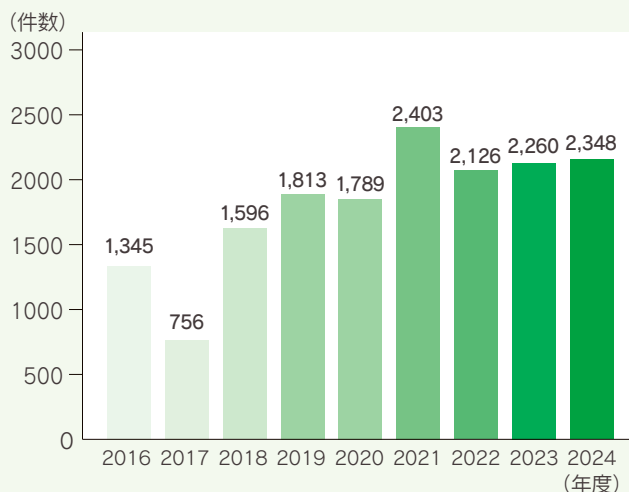
相続財産からの寄付

27,000,000 円<5件>

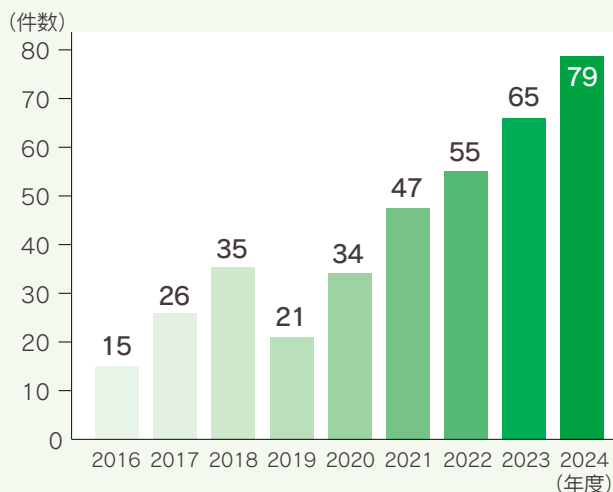
信託による寄付

2,281,050 円<1件>

お問合せ件数の推移



遺言書受領件数の推移



活動のご報告

CONTENTS

事業実施報告

レポート1

孤立・困窮する若年女性に対する相談対応及び居場所支援 P.4

レポート2

障害者の暮らしを支えるアクセシビリティ技術普及プロジェクト P.5

レポート3

笹川ハンセン病イニシアチブ・ヤングスカラー基金の設置 (国際ワークショップ) P.6

レポート4

子どもへの安全安心なスポーツ機会の提供と学生アスリートによる社会貢献活動の推進 P.7

レポート5

サッカー大会の開催等による困難を抱えた子供たちの理解促進及び支援者拡大... P.8

レポート6

「日本財団夢の奨学金」事業 (2025年度) P.9

レポート7

大阪府豊中市における里親支援センター及び児童家庭支援センターの新築..... P.10

レポート8

里親への研修提供及び社会的養護経験者の進学支援..... P.11

レポート9

2025年度スポーツ界横断の使い捨てプラスチックごみ削減プロジェクト『HEROs PLEDGE』 P.12

レポート10

2025年度スポーツ・アスリートの力を活用した災害支援 P.13

その他の活動

① 遺贈寄付を決めた方へのインタビュー P.14

② アンケートを実施いたしました ~遺言・遺贈に関する意識・実態把握調査~... P.14

③ 遺言・遺贈セミナーを実施いたしました..... P.15

④ シンポジウム「人生100年時代における社会貢献を考える」を開催しました P.15

⑤ 第9回ゆいごん川柳を募集し大賞を決定いたしました..... P.15

孤立・困窮する若年女性に対する 相談対応及び居場所支援

社会的孤立を背景に、虐待や性被害に遭っても支援窓口へ足を運ばない中高生ら若い女性があります。そんな女性たちを支えるため、日本の子どもの未来のためにと願った遺贈を活かしました。4つの活動が柱です。①SNSなどで寄せられる緊急相談に対応し、時には同行支援や生活支援もしています。同時に、性売買から抜け出したい女性向け支援窓口を積極的に周知。②東京・新宿で定期的に相談スペースを開いて相談と支援物資の提供を実施しており、年200人ほどが利用しています。③相談を受ける人材の育成のため、専門支援員養成講座を開講。④若い女性が直面する課題や困難を整理し、官民連携のあり方などを調査研究して報告書にまとめます。結果をもとにシンポジウムを開き、現状と課題を社会で共有していきます。

事業担当者からの声

子ども・若者を取り巻く課題は多種多様化しています。政府や地方自治体だけで課題を解決していくのには限界があり、子ども・若者を支援する民間団体が果たす役割が、ますます高まっています。皆様のあたたかいご支援が、課題に直面している子どもや若者たちが未来を切り拓いていく力につながっています。



公益事業部 子ども支援チーム 村田安奈



本事業には、水野久栄様からの遺贈寄付を活用させていただきました。

- 実施団体名：一般社団法人Colabo
- 支援総額：20,220,000円



障害者の暮らしを支える アクセシビリティ技術普及プロジェクト

意思疎通が難しい障害者のコミュニケーションには支援が不可欠ですが、時には支援が行き届かず孤立が深まることもあります。

そこで、障害者福祉の向上を希望されていた遺贈を原資に、わずかな動作で周囲のものを操作して意思表示できるアクセシビリティ技術を活用することで障害者の暮らし改善を目指します。

これまでに全国10か所にモデルルームを開き、障害者や家族、支援者らが実際にアクセシビリティ機器を体験できるようにしました。15人に機器の貸し出しを行い、生活の質向上を評価するための指標作りも進めています。

また、機器の導入と利用のサポートをする人材を育成する研修プログラムをオンラインで開催。導入事例集の作成や講演会開催を通じて、アクセシビリティ機器の普及を図っていきます。

事業担当者からの声

アクセシビリティ技術は、日常生活での選択肢の幅をグッと広げるためのものです。情報端末の力を借りますが、その根底には、どんな状況に置かれても大切な人達とコミュニケーションをとりたいという切実な願いがあります。皆さまからの温かなご支援で、当事者の方にも支援者の方にも笑顔の輪が広がっているのを感じます。



特定事業部 True Colorsチーム 今野諒子



本事業には、中村勢津子様、M様からの遺贈寄付を活用させていただきました。

- 実施団体名：学校法人慈恵大学
- 支援総額：55,000,000円



笹川ハンセン病イニシアチブ・ ヤングスカラー基金の設置(国際ワークショップ)

ハンセン病のない世界を実現するため、WHOハンセン病制圧大使、笹川保健財団、日本財団が連携して国際的に様々な事業を展開するのが笹川ハンセン病イニシアチブです。今回の基金設立は、ご自身もハンセン病のため国立療養所で暮らしていた方が、日本財団に託した遺志に応じて設置しました。

ハンセン病当事者コミュニティの若手育成を目的に、基金をもとにインドやブラジル、エチオピアなどで国際ワークショップを開催します。当事者団体のリーダー層は各国とも長年固定化し、次世代の育成や知識の継承が進んでいないのが現状です。ワークショップによって若手メンバーに学びと国際交流の機会を提供します。

事業担当者からの声

ハンセン病は治癒可能な疾患となった一方で、患者と家族は未だ差別や貧困といった課題を抱えています。お預かりしたご寄付を活用し、ハンセン病当事者コミュニティの若手リーダー育成を通して、若者の経済的自立や当事者コミュニティの強化を目指します。



公益事業部 国内事業審査チーム 原口美弥



本事業は、謙新雄様からの遺贈寄付を活用させていただきました。

- 実施団体名:公益財団法人笹川保健財団
- 支援総額:6,245,708円



子どもへの安全安心なスポーツ機会の提供と 学生アスリートによる社会貢献活動の推進

運動には自己肯定感を向上させる効果があるといわれ、子どもたちの身体的・精神的発達に寄与します。しかし現在、子どもたちが気軽に運動できる公園などの場は減る傾向にあります。経済的格差が広がり、運動をする機会の格差も心配されています。アスリートによる社会貢献活動「HEROs」プロジェクトの一環として、多くの子どもたちに様々な運動体験をしてもらう機会を提供しています。

バレーボール元日本代表の益子直美さんが「勝ち負けよりものびのびプレー」を重視して主催しているバレーボール「監督が怒ってはいけない大会」には多くの「HEROs」アスリートが協力しました。パラアスリートの協力で、障害の有無などに関わらず、誰もが楽しめるスポーツイベントを各地で開いています。また、大学体育会に所属する学生アスリートにも協力してもらうことで、社会貢献に取り組む若者が増える効果も期待しています。

事業の元となった遺贈寄付の寄付者からは、使い道について指定はありませんでしたが、遺言書に「大切に使ってほしい」と思いが記されていました。参加した子どもたちの笑顔が、その思いへの返事です。



本事業には、I様の遺贈寄付を活用させていただきました。

- 実施団体名：公益財団法人日本財団
- 予算総額：41,250,000円



サッカー大会の開催等による困難を抱えた子供たちの理解促進及び支援者拡大

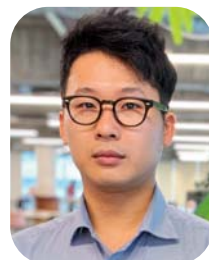
世界最高レベルのプロサッカーチーム、英国・リバプールFCを日本に招き、チャリティーマッチを2025年7月に開催。そこに関東地方にある児童養護施設等の子どもと保護者ら3千人を招待します。

世界最高峰の選手たちの活躍を間近で見ることで、子どもたちは夢を追いかける大切さや努力を続けることの意義を学ぶでしょう。また、チャリティーマッチ自体が国内外で注目を集め、児童養護施設や支援が必要な子どもたちの現状を広く知ってもらう機会となり、支援や寄付、ボランティア活動が広がることも期待されます。

「子どもの頃、貧しい状況にあったので、子どもたちが安心して心豊かに過ごせるように」と託された方や、「子どもの貧困に役立てたい」という方など6人の方々の遺贈寄付を使わせていただきました。

事業担当者からの声

子どもたちに夏休みの思い出、そして夢と希望を届けるために、英国強豪サッカークラブのリバプールFCを2025年7月に日本に招へいし、約3,000人の子どもたちを招待するサッカーチャリティーマッチの実現に向け準備を進めています。来場者向けの特別企画も検討中です。



経営企画広報部 ソーシャル・イノベーション推進チーム 高階大輔



開催前の為、写真はイメージ画像です



本事業には、柳田幸孝様、高橋興二様、寒河江幸男様、田口英子様、南雲滋朗様、大畑実様の遺贈寄付を活用させていただきました。

●実施団体名：公益財団法人日本財団

●予算総額：130,000,000円



「日本財団夢の奨学金」事業 (2025年度)

児童養護施設や里親家庭など社会的養護のもとで暮らした若者は、高等教育進学率が全体平均より低く、中退率も高いのが現実です。経済的理由やサポートする大人が身近にいないのが原因といわれます。そこで、専門学校や大学の入学金、授業料全額、生活費、住居費、留学費用などを給付するだけでなく、ソーシャルワーカーが進学や生活をサポートする伴走型支援をしています。

事業は2016年から始まり、これまでに延べ135人を支援。40人(2025年4月時点)が奨学生として在籍中です。遺贈されたお一人は生前、「奨学生が将来、自分が支えられたように他の誰かを支えることができると思ってくれば」と話していました。やる気も能力もあるのにチャンスがない若者に、意志あるお金が希望になり、未来までも照らします。

事業担当者からの声

社会的養護の子どもは、原則として18歳を迎えると児童養護施設や里親家庭など、それまで暮らしていた場所からの自立を求められます。「夢の奨学金」は、経済的支援だけでなく、ソーシャルワーカーが寄り添い、交流会などで横のつながりを持てることが特徴です。皆さまの温かい気持ちによって奨学生の夢が支えられています。



公益事業部 子ども支援チーム 吐師朝美、平林真理



本事業には、原田清恵様、浦上ヨシエ様、石田昌子様、木屋貞子様、鈴木玉枝様の遺贈寄付と、影山隆子様の相続寄付の活用を決定いたしました。

●実施団体名：公益財団法人日本財団

●予算総額：180,520,000円



大阪府豊中市における里親支援センター及び 児童家庭支援センターの新築

里親支援センターは、養育を委託された里親とその家庭で育つ子どもたちの悩みに寄り添い、支援します。また、児童家庭支援センターは地域の子育ての相談窓口として、保護者や地域住民からの相談に応じます。

新築する鉄骨2階建て、延べ床面積約600平米の建物に両センターを併設することで、複合的な支援が可能になることが期待されます。

子どもがショートステイやレスパイトのために一時的に滞在できる宿泊設備を兼ね備えていることが特徴です。一時的に養育が難しくなった場合などにショートステイを利用してもらうことで、地域で子どもたちが安心して生活し続けられる環境を目指します。

遺贈寄付された方々の「未来ある子どもたちのための一助になりたい」「生きた証として名前を残したい」などの希望を活かした事業です。

事業担当者からの声

みなさまからお預かりしたご寄付で、社会的にサポートが必要な子どもを支える里親支援センターと児童家庭支援センターを開設します。

このセンターが、地域の子どもや家庭が抱える悩みに寄り添い、家庭訪問や見守りなどの予防的支援を充実させることで、支援ニーズの高い子どもが家庭で安心して暮らせることを願っています。



公益事業部 子ども支援チーム 松本侑也



本事業には、阿久津弘子様、S様、簗部マユミ様、寒河江幸男様からの遺贈寄付と原田忠和様からの相続寄付の活用を決定いたしました。

●実施団体名：特定非営利活動法人キーアセット ●支援総額：273,615,500円



里親への研修提供及び 社会的養護経験者の進学支援

トラウマの影響を受けた子どもや家族は、その影響による行動が周囲から理解されず、「困った人」などと不適切な対応を受けがちです。

トラウマインフォームドケア(TIC)は、支援者がトラウマに関する知識や対応を身につけ「支援対象者にはトラウマがあるかもしれない」「困った人は、困っている人かもしれない」という視点で対応する支援の枠組みです。全国の里親家庭および、児童相談所や児童養護施設の職員、心理職など、日々、ケアに携わる人たち600人を対象にTIC研修を実施し、子どものトラウマへの理解を深めます。また、米国で開発されたプログラムを導入し、社会的養護を経験した高校3年生を対象に、専門職者とメンターが年間を通して一対一の伴走進学支援をします。

寄付者のお母様からの相続財産を「子どもの支援に」と希望された寄付を活用しています。

事業担当者からの声

トラウマの影響を念頭に物事を見ることを「トラウマのメガネをかける」というそうです。里親など携わる人が皆でメガネをかけて関係性を築いていけるよう、お預りしたご寄付を元に関係者に研修を届けて参ります。また進学支援では米国のモデルを導入し、大学卒業までにある様々なハードルを乗り越えることを目指します。



公益事業部 子ども支援チーム 吐師朝美



本事業には、島田ひろみ様からの相続寄付の活用を決定いたしました。

- 実施団体名：特定非営利活動法人インターナショナル・フォスターケア・アライアンス
- 支援総額：4,800,000円

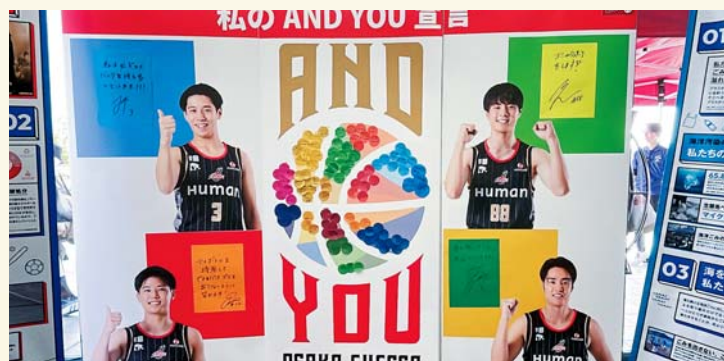


2025年度スポーツ界横断の使い捨てプラスチックごみ削減プロジェクト『HEROs PLEDGE』

アスリートが中心となって、スポーツ界全体で使い捨てプラスチックごみ(プラごみ)削減に取り組む活動が『HEROs PLEDGE』です。まず、2026年度末までに主要スポーツ興行で使い捨てプラごみ半減を目指します。「時宜にかなった活動に」と託された遺贈寄付を活用しています。いま、海洋ごみ問題が深刻化しています。世界の海には毎年800万トンのごみが新たに海に流れ出ているといわれ、2050年にはごみの量が魚を上回るかもしれないとも予想されています。ごみの多くは、ペットボトルやレジ袋など街で発生したプラごみです。

スポーツ界は大量の使い捨てプラごみを出す側でもありますから、アスリートも環境問題を考え、行動することは避けられません。プラごみ削減のモデル事例をつくとともに、一般の人や企業にも協力を求め、環境問題に関する勉強会や関連イベントを実施していきます。既に「#HEROs PLEDGE」でSNSに投稿された取り組みやアイデアをプロジェクトHP (<https://www.heros-pledge.jp/>)で掲載しています。

社会課題解決には多くの人たちの取り組みが不可欠です。その一歩を踏み出してもらうために、社会に影響力のあるアスリートたちが立ち上がっています。



本事業には、大畑実様の遺贈寄付の活用を決定いたしました。

- 実施団体名:公益財団法人日本財団
- 予算総額:80,000,000円



2025年度スポーツ・アスリートの力を活用した災害支援

能登半島地震・大雨など大規模災害が後を絶ちません。アスリートによる社会貢献活動「HEROs」プロジェクトの一環として、災害発生直後の緊急時にはアスリートたちがボランティア参加や寄付を広く社会に呼びかけ、被災現場のニーズに応えます。また、現地での活動が可能になる復旧期や社会の関心が低下する復興期には、継続支援を呼びかけると同時に、アスリートとの交流イベントを実施するなど時機に応じた必要な支援を提供しています。

能登半島では延べ約500人のアスリートが支援に参加。支援物資を提供しただけでなく実際にがれき撤去などのボランティアをしたり、1万人以上の子どもたちとスポーツで交流したりしました。「時宜にかなった活動に」と託された遺贈寄付が活動の原資です。

事業担当者からの声

能登半島地震からすでに1年以上が経過し、社会の関心は低下していますが、まだまだ避難生活を送られ、将来に不安を感じられている被災者の方が多くいらっしゃいます。そうした被災者の方の力になるのが、継続した支援、被災者の方に寄り添う支援です。みなさまあのご寄付のおかげでこうした継続的な支援を行うことができます。本当にありがとうございます。



経営企画広報部 HEROsチーム 藤田 滋



本事業には、大畑実様の遺贈寄付の活用を決定いたしました。

- 実施団体名：公益財団法人日本財団
- 予算総額：60,000,000円



① 遺贈寄付を決めた方へのインタビュー

北海道札幌市在住のK様に遺贈寄付を決めたきっかけや、遺言書を書くモチベーションは何だったのか、伺いました。

【K様】 亡くなった母の引き出しから日本財団遺贈寄付サポートセンターの切り抜きが見つかったのを見て、母が遺贈寄付を考えていたことを知りました。母は子どもの教育に関心があったので、相続した財産は日本財団の夢の奨学金事業に寄付をしました。日本財団の寄付金事業の透明性、寄付者が願ったところに活用されること、寄付金100%を社会貢献の事業に活用していることを知りました。遺贈寄付についてその頃に認識し、遺言書作成にとりかかりました。

遺言書を書くことで、「死ぬことを考えることは生きることを考えること。自分はこれからどのように生きたいのか」という思いに至りました。今までの生き方を顧みこれからを考える過程で遺言や遺贈を考えることになります。遺贈は自分の死後、自分も知らない他者に使ってもらうことになりますが、時が巡り奨学金などの子どもの支援の遺贈で、立派に成長し社会で働いている方が将来にいると思うと、死をきっかけにしてここまで大きな未来が描ける、広がりのある事業が遺贈寄付だと思います。多くの方に遺贈寄付を知ってほしいと思います。



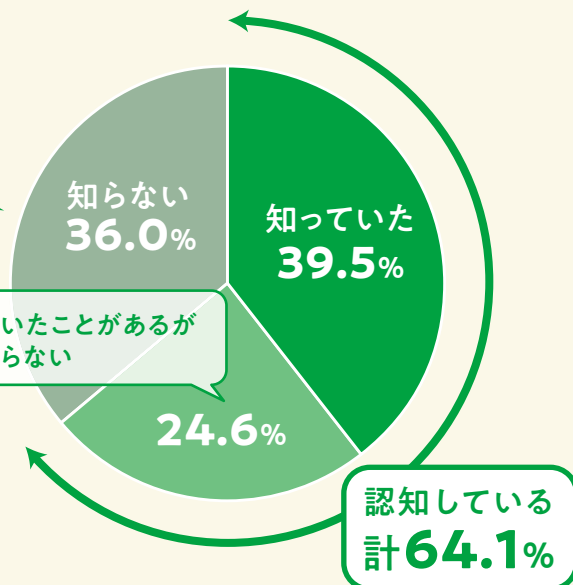
② アンケートを実施いたしました

遺言・遺贈に関する
意識・実態把握調査

2025年2月に、60歳～79歳までの男女2000人を対象に実施した、「遺言・遺贈に関する意識・実態把握調査」では、全体の64.1%の方が「遺贈」の言葉を認知しているという結果が出ました。これは、同様の調査で2023年に55.4%、2021年に54.7%であったことと比較すると、年々「遺贈」という言葉の認知が高まっていることがうかがえる結果となりました。また、遺贈の意向がある人や寄付へ興味関心がある人を合わせた遺贈・寄付関心層は23.1%であり、全体の約4人に1人は遺贈や寄付への興味関心を持っていることがわかりました。また、法定相続人別の遺贈の意向は、おひとりさま世帯では3割が興味・関心があると答えていることもわかりました。

■主な調査結果

Q. あなたは、「遺贈」という言葉を知っていましたか？



その他の
調査結果はこちらから

遺贈意識・実態把握調査_要約版

③ 遺言・遺贈セミナーを実施いたしました

首都圏を皮切りに、全国地方都市にて遺贈相談セミナーを実施いたしました。セミナーでは相続遺言専門行政書士の佐山和弘先生の他、遺贈の実務に携わる講師にお話をいただき、各回とも多くの皆様から直接思いをお聞かせいただく絶好の機会となりました。



＼その他の活動／ シンポジウム「人生100年時代における社会貢献を考える」を開催しました

日本財団ボランティアセンターと共催のシンポジウムで脳科学者の茂木健一郎氏にお話いただきました。

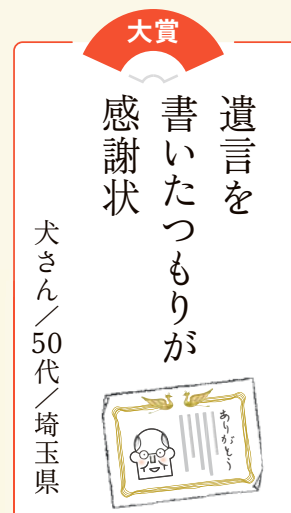
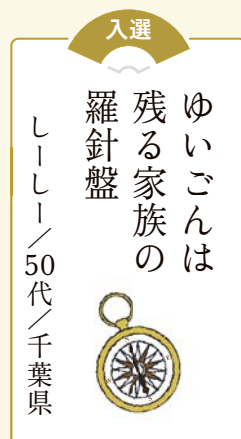
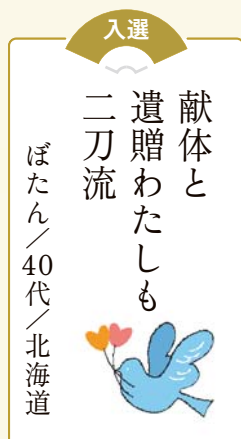
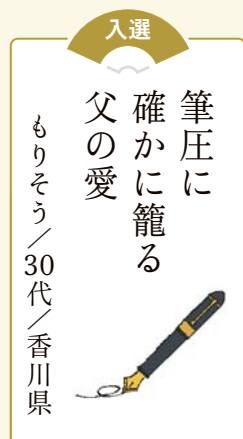
「それぞれの「生き甲斐」を持ち、誰かのために、生き甲斐のために働くことは大切。生き甲斐がないと創意工夫のある仕事はできない。コスパ、タイパばかり気にしていると生き方が狭くなってしまう。それぞれの生き様の中で、何を遺せるのかを考える遺贈寄付も大切。」というメッセージを、楽しく笑いも含めながら残してくださいました。人のために活動することの意義をそれぞれの心に刻んだひと時でした。



シンポジウム詳細 | 開催日時：2024年12月6日(金)14:00～15:00
開催場所：日本財団

⑤ 第9回ゆいごん川柳を募集し大賞を決定いたしました

日本財団では、家族や大切な人と「遺言」について話し合う機会にしてもらいたいと、1月5日を「遺言の日」に制定し、ゆいごん川柳の募集を通じて遺言の必要性を発信しています。今年度は、世相を反映した作品や夫婦間の愛の言葉を表した作品など、全国から15,011作品の応募がありました。厳正なる審査の結果、大賞1作品、入選3作品、佳作6作品、日本財団遺贈寄付サポートセンター賞4作品、特別賞(三井住友信託銀行賞,三菱UFJ信託銀行賞,三井住友銀行賞)3作品の計17作品が選ばれました。



私たちについて

担当理事 笹川 順平

ドネーション事業部 部長 木田 悟史

遺贈寄付サポートセンター事務局

チームリーダー 木下 園子

リーダー 工藤 貴子

相談員 佐藤 恵子

(五十音順) 林 勝己

山田 信幸

アシスタント 杉本 由紀子

顧問

弁護士 鈴木 大輔 氏

(東京リベルテ法律事務所所属)

執筆協力

星野 哲 氏

(立教大学社会デザイン研究所研究員)

編集後記

本冊子を最後までお読みいただき、ありがとうございました。

「遺贈寄付」は、人生の集大成として自分の想いを社会に託す、とても尊い選択です。まだ日本ではあまり馴染みのない言葉かもしれませんが、近年、関心が高まりつつあります。

この冊子が、遺贈寄付を「特別な人だけのこと」ではなく、「自分にもできる社会貢献の一つ」として捉えていただくきっかけになれば、事務局一同、これほど嬉しいことはありません。制作にあたり、ご協力いただいた寄付者の皆さま、専門家の方々に心より感謝申し上げます。今後も、皆さまの想いや意思が、未来へとしっかりとつながっていく社会づくりの一助となれるよう努めてまいります。

お問合せ先

0120-331-531 通話料無料

9:00~17:00(月~金/土日祝日を除く)

日本財団 遺贈寄付サポートセンター

〒107-8404 東京都港区赤坂1-2-2

<https://izo-kifu.jp/>

